

『思い思いの若者たち』

## あの頃、ボクは少し危ない少年だった

法人理事 布袋 太三

最近また小中高で「いじめ」が大幅が増えてきているという。「いじめ」は80年代半ばに衝撃的な社会問題となり、その後もおよそ10年周期ぐらいでメディアが注目するような時期を繰り返してきた。今回もその周期にさしかかっているのかもしれない。

もうかなり前だが、『教室の悪魔』という本がベストセラーになったことを覚えているだろうか。この本はあまりにも無慈悲で残酷で、かつ巧妙な「いじめ」の実態をこれでもかこれでもかと赤裸々に暴露したものだ。読み進むのはしんどいが必読の書ではある。

言うまでもなく学校における「いじめ」は時々の社会状況を映し、大人たちの振る舞いがモデルになっている。だから学校だけで何とかしようとしても到底無理な話ではある。

私は学校で出来ることは起こってしまった「いじめ」を教材にし、人間と社会の在りようについて可能なかぎり掘り下げて勉強しあうことではないかと思っている。たとえばいじめの加害者は被害者が自死に至ってもなおその心の深い痛みを想像することができないことがあるという。こうした心性のありようは一体どこから来るのか。それから人間以外の哺乳類は格闘があっても相手の抵抗が終わったところで攻撃もまた終わるが、人間はときにその攻撃に歯止めがかからない。これはどういうことなのか。解明したいことは山ほどある。「生きた人間の勉強」のために教師も生徒も親もまきこんで学校ができることはやはりいっぱいあると私は思っている。

さて、少々独白めくが私が中2の頃だったか、私は親の起こしたある事件をネタに級友たちから執拗で陰湿な「いじめ」を受けたことがあった。親の事件の地方紙報道の翌朝、私は覚悟の登校だったが、案の定、級友たちは見え見えの目付きで私を遠巻きにした。そして早朝というのになんと私の机には私の家族を卑しむ言葉が隔々にまで落書きされていたのだ。私は授業中耳の先まで真っ赤にしながらこの落書きを必

死で消し続けたが、そんな私の様子を教室のすべての目がおもしろがって見ていたにちがいないと思うと私は屈辱と怒りでほぼプチ切れそうになっていた。

その後私は落書きの犯人を炙り出し、応分の仕返しを果たそうと一時期は小刀を持ち歩いたりしていた。このとき私は明らかに相当危ない少年になっていた。そしてまわりの普通だった友人や、それなりに善良な教師とも私は内的にははつきりと訣別していった。

私はしだいに目立って独りでの時間が多くなっていった。もうこんなところには居たくない、一刻も早くこの地を出るのだと私は念じつづけていた。高校へ入ってからその思いは変わらず、ただ政治と文学のための読書と受験勉強だけには時間を費やしていた。

やがて高卒の春、W大キャンパスに立った私はようやく人知れず喝采を叫んだ。私は生まれ変わるのだ、昔の連中とは完璧に縁を切ろう、何もかも新しく出発するのだ、と。

振り返ってみると、あの時犯人を見つけ過剰な仕返しに走っていたら現在の私はなかった。それから群れを成して向かってきた多くの級友たちへの報復の気持ちも明らかに和らいできた。ただ、たかが少年時代のいじめだと思ながらも私は今もまだ何かにひっかかっている。心の底の底でちょっとした染みのようなものがこびりついて離れないのだ。

大学卒業の時、私はそのまま東京で出版社にでもと思っていましたが、なぜか急転し、あれほど忌み嫌っていた郷里に帰ってきた。母の願いもあったが全盲の父の面倒を殊勝にも見なければと思ったのか、それともあの少年だった頃のし残してしまっていたものを遣り直してみようと思いついたのか…。ともあれ私は今は本当に心許せる善人たちに囲まれている。もう誰も恨むことはない。いろいろあったが既に帳尻は見事に合っているのだ。

## ヴィダリブレさんとの 交流会



7月8日(土)日高・御坊圏域で「ひきこもり支援ステーション事業」を実施している「ヴィダリブレ」とコラボ企画と交流会を兼ねて、ヴィダリブレさんにお邪魔させていただき、BBQを楽しんできました。コロナ禍の影響もあり、こうした外部との合同企画は本当に久しぶりで、メンバーさんの中には、ひなたの森以外の方と交流することも初めての方もたくさんおられました。

最初は、みんな緊張もあり、恐る恐る食事だけを楽しんでおりましたが、徐々に緊張も解けてきて交流が始まり食事後は、ひなた・ヴィダのプライドをかけたゲーム大会が始まり、白熱した戦いが繰り広げられました。

帰り際には、美浜町の名所でもある、煙樹が浜の景色を堪能し、大満足の交流会を終了し、帰路につきました。

こうした他団体との交流は自分たちの世界の拡がりや、何よりたくさん仲間がいるんだという気持ちに繋がり、本当にありがたい経験となりました。また季節のイベントなどで交流できるように企画をしていきたいと思います。

